

辻荘一文庫（3）

2006/03/16

2つのテ・デウム

- # Hovland, Egil(1924~): O store gud, vi lover Deg (MC1/H846/1)
Nielsen, Ludwig(?-?): Te Deum (MC1/N669/1)

辻先生の寄贈楽譜のなかに2冊の現代曲の、おそらく自筆楽譜と思われるものがありました。両方ともノルウェー人のようです。時代を感じさせる青焼きコピーのようなもので、きれいに製本されています。寄贈を受けなかったら決して手に入らないものです。存在すら知らなかった作曲者ですから。しかし自筆楽譜ですから、今後、時代を経て貴重なものになってくるかもしれません。ノルウェーの研究者が彼らの自筆を探し、思いもかけず、日本の東久留米で発見、ということもありえます。私はグレゴリオの資料室として国際音楽資料学会に所属していますので、何らかの方法でこの2冊の所有を伝えておかなければと思っております。

Hovland の作品ですが、タイトルページに *Et Norsk Te Deum* とあるのですが、中身を見るとまぎれもなく *Vom Himmel hoch da kom* に基づくコラールカンタータの形式です。この作曲家は、オスロ・コンセルヴァトワールでオルガンを学び、作曲はコーブランドやダラピッコラに師事しています。後期ロマン派のナショナリズムの濃厚な作風から出発しますが、1950年代にはストラヴィンスキー、バルトークらの影響を受け、新古典派の技法でルター派教会音楽を作曲していきます。後に12音技法を通り、ダルムシュタット楽派から電子音楽、アレアトリーの影響を受ける中で、*Lamenti, Magnificat* などを作曲します。

80年代、90年代になると圧倒的に宗教作品が多くなり、教会暦に従って100曲以上のイムヌス、60曲のモテットなどがあり、教会音楽作曲家としてノルウェーでは最も傑出した作曲家といえるようです。自筆サインと共に1962年10月30日、と年代が入っています。

もう一人のNielsen（おそらくデンマーク人）は、有名なCarl Nielsenとは何も関係がなさそうです。11の部分からなる典型的なカンタータ様式ですが、作曲スタイルとしてはやや古い、後期ロマン派風です。これはラテン語の伝統的なTe Deumをそのまま用いています。自筆サインとともに、op.9とありますが作曲年は不明。

2人の北欧の現代作曲家のTe Deumを何故所蔵されていたのかは分かりませんが、いずれにしても、現代宗教音楽のコレクションとしてグレゴリオの家の資料室に保管されます。

杉本ゆり記